

学校・コミュニティにおける総合的な暴力予防プログラムの構築 発達の・生態学的訓練モデル

明治学院大学（東京・白金校舎）での講演から 2003年6月

Michael D'Andrea,

Professor Department of Counselor Education, University of Hawaii, Honolulu, Hawaii, 96822

伊藤武彦・石原静子・井上孝代（訳）

はじめに

われわれが生きている現代の世界は、日々たくさんの人々にひどい苦痛や被害をもたらすさまざまな暴力に満ちている。現世界の暴力の元をたどれば、社会の成り立ちを特徴づけている構造的要因に行き着く。富や資源の不平等、メディアの暴力礼賛、異なる集団・背景の人々が持つ精神的文化的価値の軽視、民族的に緊張を生む国内外の政策、世界にはびこるテロリズムや軍国主義の脅威など、数多い。

暴力の問題はどの表れ方でも、世界というコミュニティでわれわれが直面する激烈複雑な課題だから、カウンセラーやサイコロジストといった専門家が、この広汎だが予防可能な問題に果たし得る重要な役割を中心にこの検討に加わるのが望まれる。メンタルヘルスに関わる専門家は、この複雑多様で絶えることのない問題にとりくんでもどうしようもないとあきらめるのではなく、暴力問題の改善に果たし得る役割を考え試みることに時間とエネルギーをさくべきである。何ができるかを試み、分析し論ずる段階からさらに進んで、現に家族、学校、大学、勤務先、地域で、また国家間に生じている暴力を予防するために実際的な方略遂行による強力明瞭な参加をもってこの問題にとりくむべきである。

私が主張したいのは、暴力の問題を多様な文化的背景の下に全体的に論ずることと、カウンセラーやサイコロジストが学校と地域における暴力予防プログラムに果たし得る役割を考えることである。なかでもダニエル博士と私がハワイで学校カウンセラー、校長ら、教員たち、および地域の人びとを対象に行っているいろいろな訓練計画に特に注目したい。この計画はこの人たちに平和と人権意識を学校と地域に育てる総合的な暴力予防計画を作るのに必要な知識と技術を得させようとするものである。われわれが試みた研究の成果を報告し、現在までにわかった限界と、今後努力すべき方向についても述べたい。

私が作った訓練計画とその成果を評価する研究は、目的（ゴール）と目標（オブジェクト）を持っている。このセットがわれわれ2人のハワイでの仕事を導き、また平和と正義の代弁者（アドボケーツ）、メンタルヘルスの専門家としての役割を示している。目的は予防的と社会的のがあり、お互いに関連し補い合っている。前者の目的は、メンタルヘルスの専門家としての役割を広げて学校や地域に暴力が生じないようにする道をさぐることであり。後者の目的は、総合的で、人間発達、心理学、多文化カウンセリング、組織の発展、健康と幸

福の生態学的研究などを活用して、マルティン・ルター・キング牧師の言う「愛されるコミュニティ」をハワイ州に散在する公立学校のいくつかにうち立てることである。

学校と地域の総合的暴力予防プログラムをめざして専門家として力を添える際に、エネルギーと注意を注ぐべき2つの基本的目標がある。これらは上述の目的を実践に導くもので、要するに学校・地域の人びとと力を合わせて、

i. 子供、青年、成人が各自おかれた場で平和と正義の認識を強めるには、学校と地域でどんなサービス学習活動が適切かを明らかにする。

ii. 子供、青年が、お互いの間で起こる問題をどんな暴力にも頼らずに解決するのに必要な認知的行動スキルを日常生活の中で身につけ得るような教育的発達は機会を作る。(この場合の暴力は、怒りの言語的表現、いじめ、仲間はずれにする、コンフリクトに対処するに物理的暴力を行使のどれであるかを問わない)。ことである。

「愛されるコミュニティ」の建設

愛されるコミュニティ建設の理念は、われわれの暴力予防理念の中心的位置を占めるが、心理学やカウンセリング分野の人の多くはこの構造をよく知らないだろうから、ダニエル博士と私が、仕事をすすめるにあたって、この構成概念をどう操作的に具体化してきたかに簡単に触れよう。この用語についての以下の記述は、我々の現在執筆中の共著テキストである『多文化カウンセリングと発達：多様な社会へのエンパワメント方略』からとったものである。

我々がこの執筆中で示したように、マルティン・ルター・キング牧師は1960年代のアメリカでの健康と幸福を推進するにあたってこの語を広義にたびたび用いた

(Washington, 1986)。最近はより尊敬できる健康な社会を一般的に表すのにはあまり使われないが、愛されるコミュニティの概念は時の流れに抗して、アメリカの異なる分野、専門の人々の手で復興し始めている。文筆家、大学教授、文明評論家として Bell Hooks は愛されるコミュニティの意味を調べ、それがアメリカの多くの人々に特に、平和と正義が個人と集団の両様の心理学的健康と精神的幸福を支えたと考える人びとに魅力を持つ、としている。Hooks は、「多くのアメリカ市民は今なお、愛されるコミュニティが成り立つ社会、愛の絆と和が差異を越えて人びとを結ぶような社会に生きることを望んでいる」と指摘している (p.263)。

専門カウンセラー、サイコロジストなどメンタルヘルスの専門家達は、たくさんの人の発達、心理的健康、精神的向上を進める上で重要な役割を持つ。それは知識と技術をフルに使い協力して学校や人びとが住み働く場に愛されるコミュニティの建設を助ける道を開くことによってである。「愛されるコミュニティ」の語はメンタルヘルスの専門家達、とりわけあなたの方のように、暴力予防方略の講演に進んで聞きに來る人たちには魅力的かもしれないが、ダニエル博士と私がくり返し説いてきたのは、キング博士と Hooks がその著書で示している「愛されるコミュニティ」の多分にスピリチュアル（でしかも一般的）なイメージをのりこえて、これが理論的概念として学校やコミュニティの場でどのように働くかを、より広く实际的に理解するように努めるべきだ。ということである。そこで、この概念の持つ意味をはっきり分かってもらうために、愛されるコミュニティの特徴をいくつか略記しようと思う。そうすれば、この概念が学校とコミュニティに総合的な暴力予防プログラムとサービスを作り進め

る際に大きな価値を持つとする私達の主張をわかってもらえると思う。

1、愛されるコミュニティは、そのメンバーが日々高度の尊敬を互いに持って交わっている集団である。といって不一致を否定したりさけたりするのではなく、道徳的価値や信念をはっきり述べ合い、個人間の違いやあらゆる対人場面、特に多様な社会的環境で起こりがちな矛盾などについて進んで論じ合う人々の集まりである。

2、愛されるコミュニティは階級的でない平等な関係を尊重する。

3、愛されるコミュニティは人間の多様性を当然とみなしてメンバー間の率直な討論を常に奨励する。

4、愛されるコミュニティは皆で平和と正義の原理を実現する方向で議論をし、あるメンバーが生活の中で経験しがちな不公正な扱いをなくすように努める。

5、愛されるコミュニティは、全員の発達を促すために作られた実際的な方略に皆が喜んで参加し、共に活動することを特色とする。

6、愛されるコミュニティはコミュニティが力をつけメンバー間の有効で尊敬できる交わりが実現することをめざして、常に熟考と幅広い討論に進んで参加することを特色とする。

こうした愛されるコミュニティの諸特色を実現するために、たくさんのカウンセラーやサイコジストが介入やサービスを進めている例をいくつかあげよう。

・文化的に異なる集団・背景を持つ生徒たちの間の差異を、多くのレベルで受け入れることをめざす学校プロジェクトの推進。

(D'Andrea & Daniels,1996)

・組織の面で多様性への対応を工夫

(Arredondo,1996)

・アフリカ系アメリカ人 (Lipford Sandor,2000)や先住アメリカ人 (Herring, 2000)、ラテン系アメリカ人 (Arredondo & Vasquez,2000)、ゲイ・レスビアン・両性愛者・トランスジェンダー (Barret,1998; Chen-Hayes, 2000) 多人種家族 (Kenney, 2000) の権利と尊厳を守り進める様々なアドボカシーのサービス。

・年齢差別と戦い高齢者の権利推進をめざすコミュニティを基盤とした介入 (Myers, 1998)。

・現代社会に前向きな変化を生ずる力としてのスピリチュアリティを強調するカウンセリングと発達の方略 (Miranti & Burke,1998)。

愛されるコミュニティ建設を進めるにあたっては、文化面に詳しいカウンセラーが、次の原理・信念に従って行う。

1、メンタルヘルス専門家の目的は、さまざまな患者たちの心理的発達と解放を進めエンパワメントする(力づける)ことである。

2、人間の尊厳と多様性を推進するには、メンタルヘルスを扱う専門分野に新しい価値体系を作り進めることが必要とである。

3、人間の尊厳と多様性を推進するには、家族、学校と大学、職場、コミュニティの諸機関、政府や自治体のプログラムと役所等の構造と機能に大きな変化が必要である。

4、メンタルヘルスの専門家たちは、個人・グループ・組織・制度・社会に 21 世紀に生ずるだろう変化に際して、それらを促進する重要な役割を担い得る。

5、アメリカにおける教育的、健康促進的システムが穏健妥当な役割を果たし続けるには、新しい理論モデルが必要なのは、(a)

メンタルヘルスの専門家が自分たちの役割と責任を歴史に浮かべて考え、(b) 文化の多様性と社会正義に深く関与し、(c) 次の数十年に向けて集団・背景の異なるたくさんの人々を前向きにはげます有効で道徳的な実践へと進む道を開くためである。

6、カウンセラーとサイコロジストたちは、個人来談者のメンタルヘルス推進だけでなく、持ち場に応じてあいのコミュニティ建設に協力することにより、この社会多数の人びとを積極的に鼓舞しようとする努力が必要である。この労力とは、上述した愛されるコミュニティの諸特徴を各自が働く場、すなわち学校、大学、ビジネス、教会、政官機関等に広げることである。

西欧心理学、量子力学、東洋哲学の統合

平和と正義を広め、愛されるコミュニティを創り、人間発達と心理・精神的幸福を増進しようというわれわれの努力は、ダニエル博士と私が Govemort State 大学の友人たちと共に作ったコミュニティカウンセリング理論および関連する諸概念に基づいている。(Lewis, Lewis, Daniels, & D'Andrea, 2003) .この理論は「コミュニティカウンセリング：多様な社会でのエンパワメント方略」という本に述べてあるが、いろいろな生態学は発達の多文化理論、西欧の心理学、数理科学、東洋哲学等に発した考えを統合したものである。その中心的概念・考え方はおおよそ次のようである。

1、われわれは皆高度に依存しあう生態学的圏内にいる。

2、生物無生物を問わず、地球上の存在は直接間接に関わり合っている。

3、人間の環境は人間を育てると同時に制限している。

4、メンタルヘルスの専門家に助力を求める目的は、個人とコミュニティへのはげましを強めることである。

5、この助力は多面的な方が単一の働きかけより有効である。

6、個人の発達が多面的なものだと知るとは、メンタルヘルスをめざすサービスの計画・実施にとって肝要である。

7、予防は、治療より有効である。

8、コミュニティカウンセリングの理論はさまざまな場（教育施設、ビジネス、人間サービス機関諸機関）で用いることができ、集団や背景の異なる人々に適用できる。

私はこれらの考え方をまとめて、それがアメリカと世界諸地域の学校・コミュニティで総合的計画を作り進めることとどう関わるのかを話そうと思う。しかし、訓練と調整は人間発達の生態学的理論に基づくのだから、ここで暴力問題の世界的広がり、この問題推進におけるアメリカの役割、暴力を予防し平和と正義を世界に広げる上でわれわれがやれることは何か。に言及するのが大切と考える。

暴力問題の世界的広がり

暴力は世界に広がっている。戦争、家庭内暴力、暴力犯罪、性暴力として明確に表れるし、対自己暴力も日本とアメリカにおける薬物・アルコール中毒や自殺の増加に見てとれる。

こうした暴力以外にも、人類始まって以来人々を悩ませてきた世界的疫病があり、個人・集団の精神健康と心理的幸福を損なってきた。先にあげた暴力諸あタイプのように明瞭ではないが、この種の暴力はわれわれの心に住みついている微妙な形の心理的暴力とし存続している。それは自分たちと違う人々に対する否定的で不正確でステレオタイプな感覚と思考でサイコロジストたちの言う「哀れみの認知」「共感的理解」を欠いている。

アメリカの歴史は、所属、背景の異なる

人々の人間性をおとしめるさまざまな民族差別と文化的抑圧の例で満ちている。いまイラクで進行中の無法な戦争は、白人と西欧文化の優越、民族主義、資本主義、軍事力への心理的宗教的信念がこの種の、現在イラクで見るような暴力と人間破壊の土台にあることをはっきりと示している。人間発達の生態学を含む心理学的見地から言えば、ある国が、他の国が大量の加害をもくろんでいるらしいという偏り誤った情報に基づいて、一方的に軍隊の力でこの問題を解決しようと決めるなら、その国は今われわれがハワイで実現へ努力を傾けている平和と正義、非暴力の原理と正反対の行動をしている。そうした政治的行動はまた「哀れみの認知」すなわち自分と違う人々を真に理解しようとする努力を無にするものである。

サイコロジスト、カウンセラーはさまざまな生態学的要因を取り入れることによって、「文化的民族的に異なる集団の人びとに対する「哀れみの認知」「共感的理解」を育て得る好位置にいる。そうすることでメンタルヘルスの専門家たちは尊敬・互助・調和・を体現する愛されるコミュニティを建設することが可能になり、これらの美德は東洋の哲学者とくに仏教の師たちの謀と通じている。幸いなことにその多くは、ダニエルと私のハワイでの仕事にも生かされている。

平和、正義、メンタルヘルスと幸福

メンタルヘルスの専門家として私は、二つの信念を持っている。一つは専門家としての考え方で、われわれは心理学のエキスパートという地位を学校と地域に平和、正義、メンタルヘルスと幸福を実現するために用い得るし、そうすべきだということである。この信念は、これらがすべて同じコインの諸面だという認識に基づいている。

第二の信念は、カウンセリングと心理学の領域が進化して最近変化が生じているという認識からきている。私は、カウンセラーとサイコロジストのますます多数が平和、社会主義、メンタルヘルスと幸福が互いに結びついていることを認識するようになったと思っている。理論的著述と臨床的研究経験を積むうち私はこれらの概念、考え方、心理学的原理などの入り組んだ総体が、人間発達、心理学的幸福、さらに平和と正義の認識を学校や地域に実現するために心理学的プログラムとサービスを企画し実施する上で有用だということが分かってきた。カウンセリングと心理学の分野で生じている変化は、ダニエルズと私が多文化テキストで大いに論じた通り、アメリカにおけるメンタルヘルスの専門職に新時代の展開をもたらしている。この新時代の特徴は、新しいパラダイムが出現してサイコロジスト、カウンセラーたちがその使い方の訓練を受け始めたという所にある。

新しい時代とパラダイムの到来は、この分野で働くカウンセラーとサイコロジストの多くが、経験も考えもしなかった思考や感情をかきたてるものだから、このパラダイムの変化の意味をわれわれ一人一人が考えねばならない。古い問題を新しいやり方で考え、わが専門の目的・役割を見直してわが信念を明確にする必要が生じたのである。これは人びとには納得しかねるかもしれないが、多様な文化的背景を持ったたくさんの人々が少なからず直面してきた心理学的精神困難を総合的発達の生態学的に分析することから生まれた考え方なのである。

残念ながら、アメリカの歴史はわれわれが暴力的な国民であることを示している。困ったことにその証拠はたくさんある。歴史的に言うところの暴力のルーツは、アメリカ先住民が、ヨーロッパ系白人移民から受

けた皆殺しの扱いや、たくさんのアフリカ人と、その子孫に恐るべき物理的・心理的暴力を与えた奴隷制度へとたどることができる。現在もなお新しい形の暴力がわれわれのまわりで起きている。社会の至る所で女性と子供を襲う家庭内や性暴力、メディアやビデオゲームが映し出す暴力のイメージ、学校で様々に起こる暴力（からかい、いじめ、殴る、蹴る、銃撃）など、まだまだたくさんある。これらの暴力がいかに深くこの社会に広がっているかについて、Walker & Gresham (1997) はこう指摘している。

「アメリカにおける暴力は、この社会の至る所に広がる毒素であり、すべての人の生活の質を落としてきた。1970 年以降で初めて、見ず知らずの人への暴力行為数の割合が知人間のそれを上回った」(Hughes & Hasboun, 1996) この変化は、公的な場での安全性が著しく低下し、何人も暴力の犠牲者となる可能性から逃れ得ないことを示している。

現代アメリカ社会で暴力の問題がさまざまに現われ続ける一方で、ここ数年公立学校で起こる命にかかわるような傷害事件が報道されて、国民の関心を集めてきた。暴力事件が地域で、特に学校の場合で起こると、生徒、親、教師、校長達は皆カウンセラーやサイコロジストに助けを求める。暴力行為の犠牲者と犯人の両方にカウンセリングのサービスが期待されるわけだが、その一方で学校での総合的な暴力予防計画を立てるために事件を生かしたリーダーシップをとることも、彼らに求められることが多くなってきた。

学校での暴力予防プログラム立案と実施を指導するには、カウンセラー・サイコロジストたちはそうした要素と関わる四つの重要な間に答えられなければならない。それは、つぎのようである。

1、学校や地域に暴力予防プログラムを作ることと関わって「暴力」とは何を意味するか？

2、学校で暴力予防プログラムづくりを助けることはなぜ大切か？

3、学校で暴力予防策を総合的に立てるにはどんなサービス要素が必要か？

4、学校で暴力予防の総合プログラムを有効に作り実施していくには、どんな訓練モデルが有効適切か？

この間のどれとも関わりながら、ハワイの4小学校で実施した発達の生態学的暴力予防訓練モデルの話に重点をおき、さらにダニエルと私が4校で行った訓練プログラム評価の結果についても論じたい。というのはこの評価データによってハワイでの研究で用いた訓練モデルの有効性、つまり学校職員や地域の人びとがそれらの場で広汎な暴力防止戦略確立に必要な知識と技術を得るように専門家達が助力し得ることが明らかになったからである。

暴力の定義

暴力という言葉は、暴力予防理論家や研究者ごとに違う定義がなされてきた。例えば、エリオットら Hanbug and Williams (1998) は暴力を「他人の傷害・損害を意図して物理的力を用いたり、脅したりすること」とし、Hanburg (1998) は「意図」がこの定義の核心であるとして意図した傷害と、車の事故、転落、中毒、溺れる、火事など偶然起こった無意図的なものを区別した。この区別を重視する理論家達がいる、アメリカで年々生ずる子供、青年の傷害死のうち意図的暴力によるものは約3/1だという事実を強調する。

学校で暴力が起こるのを防ごうと方略を練る際に、多くのプログラムが、この定義を採用している。が、他方で、暴力の定義を広げて、悪口、武器をちらつかせる脅し、

文化破壊、財産犯罪といった、反社会的行為も含める向きもある。(Futell, 1996; Howard, Flora, & Griffin, 1999)。ダニエルら(1999)はまた、暴力のさまざまな形を6つのカテゴリーに分けることによって広い定義を試みている。

1、物理的暴力 公立学校での拳による攻撃に始まり、不良少年のケンカ、数多いが報道は少ない家庭内暴力(National Health and Education Consortium, 1999)、高齢者虐待(Hart, 2002)など、この国の至る所で起こる物理的暴力行使は、すべての分類に入る。

2、性的暴力 このカテゴリーには、この社会で同性愛者や女性をおとしめる憎悪と攻撃の行動が含まれる。学校での暴力問題にメディアの関心が集まるが、もっと多く起こる女性への暴力には同じほどの注意は払われてこなかった。この問題に光をあてたのは、国立健康と教育コンソーシアムが、アメリカの女性は12秒ごとに家族、夫、ボーイフレンド、知人などに殴られる、と報じたからだだった。(National Health and Education Consortium, 1999)。

3、メディアの暴力 詳しい人は知っているだろうが、アメリカの平均的な子どもは12歳までにテレビの暴力場面を1万時間以上見ている(Hughes & Hasbrouk, 1996)。1999年にコロラドのColumbine高校で起こった殺人事件を研究的に扱った報告によれば、暴力フィルムの反復視聴、インターネットの憎悪サイトへのアクセス、暴力的ビデオゲームで遊ぶなどすべて、ハリスらがこの高校で撮影を計画した事柄との関連が見られた。

4、文化的民族的暴力 アメリカが「史的にヨーロッパ系白人多数だった国から、市民の多くが非白人・非欧出自の国へと変わるなら、この国の特徴である民族的緊張が

高じてやがて、文化的民族的憎悪と暴力が増幅して現われるだろう、と多文化カウンセリング理論家たちは論じている。

(D'Andrea & Daniels, 1999; Jones, 1997; Sue & Sue, 2002)。

この予言を心にとめて眺めると、困ったことにアメリカではここ数年間に憎悪集団の数が増えてきている。南部貧困法制センターの1999年の報告によれば1998年に民族の暴力に関わった憎悪集団は537あり(1990年以降20%の増加)1998年にさまざまな形の民族的暴力に関わった。この報告にはさらに「インターネット上の憎悪サイト(基本的に白人至上主義に人を募るもの)は、前年比60%の劇的増加をしている」とある。

5、政治経済的暴力 アメリカでは1990年代に多くの人々が経済的豊かさを経験したが、2002年の統計によれば1800万人のアメリカ人がこの世で最も豊かな国で貧困生活を続けている。学齢のホームレス数が最近10年に増えている事実は多くの学校関係者、カウンセラーの注意を引いたが、学校に空腹状態で来たり親の車や混みあうホームレス用仮住宅で寝るために学校ではぼんやりしている子供たちを、勉学の可能性に目覚めさせる試みは彼らにとっても至難である。要するに貧困は、個々人を経済的教育的・物理的・心理学的・社会諸問題において弱者とするだけでなく、認知と感情に影響を与えて自己価値尊感を奪い、さまざまな暴力の育成源となるのである。

6、沈黙という暴力 この社会にゆきわたっている暴力に注意を向けないことは、暴力の生起を助勢する。暴力を見ないふりをすることは、暴力の暗黙の見逃しにほかならない。つまり暴力に沈黙するなら、静かで受け身の共犯という形でこの問題とかわることになる。

このように暴力の定義を広げることによって、カウンセラー、サイコロジスト、大学院生たちに、この複雑な問題の多面性に気づいてほしいのである。ダニエルら (D'Andrea & Daniels, 2002; Luthar, 1999) は次のように述べている。「カウンセラー・サイコロジストたちが学校と地域で生ずる暴力レベルが上がらないように努力しようとするのなら (a) この国は暴力が広がっている事実をしっかりと認識し (b) この問題をめぐる議論に積極参加し (c) 経済、教育、社会等に関わる提言をしてこの国の富と資源の平等化に貢献し (d) 学校と地域の未来に暴力を生じさせない総合的プログラムとサービスを実現させなくてはならない」。

ダニエルら (1999) はさらに、カウンセラーやサイコロジストは、この国民的課題に沈黙することも、学校・地域で暴力が存続し続ける現状改善に向けて解決を求める専門家としての、また道徳的責任を避けることもできない、と強調している。

「暴力の広い定義と関わって、議論の必要な事柄に沈黙を守って暴力を存続させるなら、カウンセラーとサイコロジストは心理学的、性的、メディアによる文化・民族的、政治的、経済的すべての暴力に受け身に従属するという罪を犯し、それらの暴力がわが国のたくさんの人びとの健康と幸福に悪い作用を及ぼし続けるのを許すことになる。」

学校の暴力予防プログラムへの協力はなぜ大切な

公立学校で暴力予防の総合的なプログラムの設定・実施が必要な理由は二つある。第一に学校は一般的に言って、予防的な心理教育的学習機会と学級での生活スキル訓練サービスとを提供する。理念的なしかけである。予防的サービスは基本的に言って同

一人が、例えば小学校、中学、高校と進む若者が、共通して現われ得る問題にくり返し出会わないためのものである。メンタルヘルスの専門家たちは、アメリカの公的健康分野からこの術語を借りてきて、予防的調整には3つのタイプがあるとした。第1次、第2次、第3次の予防方略である。この3型について、Lewis たちはこう言っている。

「第1次予防は、別に弱点のない人びとが情動的問題に出くわさないようにし、メンタルヘルスを増進することに重点をおく。第2次予防は、問題の早期発見と処置、第3段の予防は、障害の影響が長引かないようにする取り組みである。つまり第1次予防は環境からのストレス要因を減らして人びとの生きる力とスキルを育てることである。(Lewis, Lewis, Daniels, & D'Andrea, 2003, p.25)」

学校で働くカウンセラーやサイコロジストたちは、深刻な心理学的問題を経験中の生徒と出会うことはそう多くない。そんな生徒がいても必要な強力長期のケアを彼らがすることはめったになく、地域のサービス機関で心理学的援助を受けるのが普通だ。だからその手配程度で、学校カウンセラーやサイコロジストが第3次予防と関わることはめったにない。勤めている学校で、第2次予防（個人、小グループ、学校のカウンセリング）と第一次予防（心理教育的プログラム、生活スキル訓練、相談助言等）のサービスをするのが普通である。

アメリカで学校カウンセラー・サイコロジストの数が増えるにつれ、第一次予防と第2次予防方略が大勢の青少年メンタルヘルスと心理学的幸福を、程よいコストで増進するよいやり方である。ことが分かってきた。(Lewis *et al.*, 2003; Swisher, 2001) . こうして低コストで大きな心理学的利点ありと知られるにつれて予防方略をとる公立

小学校がアメリカ中で増えてきた。
(Baker,1999)。

Conyne (1994) は初期と第2次予防策の中身を述べており、それが学校の予防方略の成否を左右するという。カウンセラー・サイコロジストたちが、予防方略の実行により、社会一般のまた学校で起こる暴力のレベルをさげようとするときこうした質の問題を心に留めることが大切である。

1、学校での予防カウンセリングは、生徒が暴力の傾向を示す前（初期段階）でも、ある生徒が、いじめ、悪口、殴打など攻撃行動を表したあとでも（第2次予防）有効である。

2、第一次と第2次予防カウンセリングは、現在健康だが暴力行動をする恐れのある人や、生活をうまく進めることに困難を示し始めた人を対象とする。暴力予防の視点から言えば、そうした人たちは生徒でも成人でも前述した諸暴力のどれか物理的メディア政治的経済的、性、文化と民族等暴力の犠牲者かもしれない。

3、予防処置は、新しい問題がある集団の人びと（小、中、高の生徒など）に起こることを防いだり減らしたりできる。

4、予防の努力は、リスクを減らすと同時に防衛要因を増す。リスク要因には、家庭内破壊ダイナミズム、情動的困難、低い自尊心、栄養不信、対人スキル未発達などがある。アメリカの多くの学校で行われる心理的心理教育生活スキル訓練は、これらのリスク要因に対抗するもので、親のカウンセリングと教育、個人や小グループのカウンセリング、個別指導、学校生活指導プログラム、意思決定や問題解決、ストレス処理、権利主張等の訓練（攻撃行動が強まる代替りの）健康クラスなどがある。

5、予防カウンセリング方略は生態学的体系的に行われ、効果のレベルも複雑に入り

組んでいる。だから、学校での予防プログラム実施にあたってカウンセラーとサイコロジストは、必要な生徒に直接カウンセリングをするだけでなく、さまざまな助言、提案、組織改善、コミュニティサービスとの連繋などによって、生徒の学級や家族に前向きの変化を生じさせ、やがてそれは全校全地域に及ぶのである。

6、予防カウンセリングは、社会正義と深く関わっている。コミュニティカウンセリング理論によれば、暴力問題の改善を目指して予防対策を行うカウンセラー、サイコロジストは、自分達が社会正義の推進に適した位置にあることを自覚し、この社会のすべての人は自由に生き暴力にさらされずに幸福を追求する権利を持つと考えて、そのために力を尽くそうとする。暴力はこうした基本的民主的権利を台無しにするものである。

この論点は、なぜ、学校での総合的暴力予防プログラム設置、推進と支持が必要かの第2の理由とつながる。これは、学校はなぜあるのかという最重要な理由と関わる。学校の存在理由となると多くの人は若者が将来よい働き手となるのに必要な知識と技術を得る所と考える。別の人びとは、社会の期待にこたえて満足な生き方ができるよう、態度、行動のセットを学ぶ。社会化の機能を重視する。学校がこの二つの目的に役立つことは確かだが、もっと大切な学校の目的は次の世代が、アメリカの制度・状況の特徴である民主的な生き方をさらに進めるのに必要な知識・技術・態度を身につけることの保証だと考えられる。

わが国ではさまざまなレベルと形の大量の暴力が、年々何百万人もの人びとに不当な苦痛、災難をもたらすだけでなく、生存、自由、幸福の追求といった人びとが持って生まれた可能性を充分に実現する基本的権利、民主的な生き方をくつがえしかねない。

だから学校と地域の総合的な暴力予防プログラムへの積極的参加表明は (a) 人びとを苦しめる深刻な社会的問題を改善し (b) アメリカに生きる人々が民主的権利を享受し得ると保証することになったのである (D'Andrea & Daniels, 1999)。

学校における暴力予防の総合的試みはどんなサービス要素から成るのか

学校の暴力予防プログラムへの関心と支持が増すにつれ、プログラムに含まれるべき要因は何かについてサイコロジストの間でさまざまな意見が出てきた。例えば米国教育省 (U.S.Department of Education, 1998) が出した「早期の警告とタイムリーな反応：学校安全の手引き」という本では、学校が暴力予防に総合的に取り組む場合に不可欠な6つの要素をあげている。学校暴力予防の早いスタートと長期の取り組み、強いリーダーシップと訓練方針、スタッフの成長、親の参加、仲間の連帯とまとめ、文化的発達の教育と心理的サービスである。

また、別の学校暴力予防総合モデルとして Walker & Gresham (1997) は7要因を挙げており、前述のとかなり重なっている。

(1) 校内に前向きな雰囲気を作ること (2) 全校生への明確高度な行動期待表明 (3) 包括的な教育的価値と実践 (4) 学校環境・プロセスと生徒を結ぶ働きかけ (5) 生徒と親の参加を強める試み (6) 社会的スキルの向上の機会提供 (7) 全校的問題解決方針と実践の7つである。

ダニエルと私は、また別の包括的な考え方を示したが、それは生徒に直接、学校・地域に直接、生徒に間接、学校・地域に間接の4要素から成っている (D'Andrea & Daniels, 1999; Daniels *et al.*, 1999)。この理論モデルは暴力予防への発達の生態学的アプローチで、Lewis *et al.* (2003) のコミュニティカウンセリング枠組みに基づいてい

る。この枠組みの他と違う特徴は、教育の場で働くカウンセラーやサイコロジストが使うように作ってあることである。この4サービスを詳述しよう。

(1) 生徒への直接サービス

カウンセラーやサイコロジストが学校に招かれるのは、怒りや表出の著しい生徒にカウンセリングをする。生徒直接サービスのためが多い。怒りや攻撃の度をこした爆発はケンカやいじめなどの物質的暴力に進むことが多い。前述の理論によれば、学校暴力予防への総合的取り組みは、学校カウンセラーとサイコロジストに2つのことを求める。(a) 度を越したり怒りや攻撃を表す恐れのある生徒を見分ける。(b) 彼らを個人か小グループでカウンセリングし、怒り、憎しみ、攻撃をより有効な新しい仕方で行うことを学ぶよう支援する。怒りの新しい処理技術、対人問題解決能力、ストレス、になる出来事をうまく扱う方略を見に付けさせ、人間の多弾性への尊敬の念を増すよう援助するのである。(Daniels *et al.*, 1999) 生徒への直接サービスは、予防カウンセリングの第2段にあたる。対象の生徒がすでに怒りの処理、対人問題解決技術等の未発達を示し初めていて、放置すれば、明白高度な暴力に進む可能性が大きいからである。このサービスは学校暴力予防プログラムの重要部分だが、学校・地域への直接サービスによって補う必要がある。

(2) 学校・地域への直接サービス

Lewis *et al.* (2003) によれば、学校・地域への直接サービスは元々、全校生徒の発達を促すための予防教育と生活技術訓練であった。そのためにカウンセラーとサイコロジストは、学級での幅広い心理教育的発達のガイダンスプログラムを実施してきており、これは、全生徒個々人の心理的発達を促すもので、問題児のためではない。前述のとうりこうした学級での調整方略は、

多数の生徒の心理学的発達と個人能力を増す、コストに見合うよい方法である。

D'Andrea & Daniels (1999, 2002) によれば、暴力予防への総合的取り組みは、全生徒がその生涯にぶつかるであろう、さまざまな対人的問題とうまく対応できる生きたスキルを身に付けるよう支援する必要がある。そのためには正規のカリキュラムの中にすべての生徒が問題解決や処理スキルといった暴力と正反対の力をつける多様な機械が用意されていなければならない。

こうした幅広いサービスがいろいろな学校で有効であるという研究報告が最近出た (Chun, 2001) また別の研究者たちは、多文化ガイダンスプログラムが小学校児童に、文化的民族的に多様な場でよく起こる対人問題を平和的有効に処理する社会的スキルを育てたと報告している (D'Andrea & Daniels, 1995; Salzman & D'Andrea, 2002)。

(3) 生徒への間接サービス

アメリカでは多数のカウンセラーやサイコロジストが学校でいろいろな直接サービスをしているが、別の方略で間接的にやっている人々もある。カウンセラーや、サイコロジストがよく使う方略は、正規のカリキュラム全般に渡り生活スキル訓練の新しいやり方に興味を持つ教員たちのカウンセリングである。この種の専門相談と発達の努力はわれわれ (D'Andrea & Daniels, 1999) の学校暴力予防総合プログラムの発達は生態学的理論の核心であり生徒の間接サービスと呼んでいる。

このサービスの重要さについて Daniels *et al.* (1999) は学校での暴力予防方策がうまくいくには、校長らや教員たちの支援と参加が必要と強調している。アメリカの校長・教員たちの多くは、学校や自分たちの住むコミュニティで暴力が起こらぬように、予防することの大切さはよく知っている。しかし彼は、教育や管理の専門家では

あるが、暴力予防の総合的取り組みにはどんなサービスが必要かについてはよく知らないことが多く、どこでどうやればそうしたプログラムに協力できるかわからないでいる。(D'Andrea & Daniels, 1998)

アメリカの学校で働くカウンセラーとサイコロジストは、校長、教員らが暴力予防プログラムに果たしえる役割の自覚を助けることによって、間接的な生徒サービスを行うのに好適な位置にいる。メンタルヘルス実践家として校長・教員たち対象のワークショップや、個人相談をやり、彼らが学校暴力予防方略を助けるには具体的にどうすればいいのかの知識を増させるのだ。Daniels *et al.* (1999)によれば、校長教員たちの訓練や助言サービスによってやる必要があるのは、次の諸力を助けることである。

- 1) 暴力の早期徴候の見方を学ぶ
- 2) 子供・青年が問題解決のため怒り・憎しみのほけ口として暴力を用いないように助けえるという自覚を増す。
- 3) 学校での対人問題解決の役立つ新しいスキルを学ぶ。
- 4) 学校暴力予防総合プログラムに組み込めるような地域資源 (法律相談所・性問題相談センター・家庭内暴力予防プログラム・ホームレス保護所・反民主主義者プログラム) などについて知識を増やしておく。

(4) 学校・地域への間接サービス

このモデル最後の要因は、暴力予防総合プログラムに学校・地域への間接サービスを含めることの重要さである。このサービスの主な目標は、法律相談員、政策立案者、選挙を経た公務員など地域の要人たちを学校暴力予防プログラムの支持者にすることである (Daniels *et al.*, 1999)。カウンセラーたちが彼らの指示を得るためにできることは、

- (a) 生徒の教育方針変更や学校環境安全化計画などで政策変更が必要になったとき

校長たちと相談する

(b) 法律分野の職員や少年審判員と話し合うことで、喜んで分け持ってもらえるのは何かを知る

(c) 法律家たちが州政府や市議会で犯罪を憎む法律を通すのを支持する

(d) 現学校暴力予防プログラムとサービスの継続的活動を支持するよう、政府、関係者から公私にわたる約束・保障を得る、などである。

学校での暴力予防の総合的プログラムを設置し実施するのに適切有効な訓練モデルとは何か

学校での暴力予防の枠組みとして、どれを選ぼうと、その成否は、カウンセラーサイコジストがこのプログラムと直接間接に関わりを持つ有力者たちの支持をどの程度得るかにかかっている (D'Andrea & Daniels, 1998)。暴力予防プログラムに引き入るべき有力者たちの中には、校長、カウンセラー、教員、親、生徒、と地域の重要人物ほかが含まれる。

これらの人々の支持を得るには、学校暴力予防総合プログラムに必要なサービス要因とは何かについて彼ら皆が理解できるような訓練サービスがなくてはならない。学校暴力予防プログラムを発展させる第一歩として、校長ら、カウンセラー、親、教員、生徒、地域に人々の訓練が必要なことから、どんな訓練モデルがテストされ有効性がわかったかを知る必要がある。カウンセリング、心理学、教育関係の専門、文献を広く漁ったが、そうした訓練タイプの有効性についての報告は見当たらなかった。校長や教員たちが、この領域の知識やスキルを増すのに有効な暴力予防訓練の枠組みとは何かを、メンタルヘルスの専門家たちに知らせることが重要と考えて、私は前に述べた理論モデルの一つについて有効性をテキス

トすることにした。コミュニティカウンセリングモデルに基づく。発達の生態学的モデルを手がかりに、ハワイの4小学校の校長ら、カウンセラー、教員たちを訓練することによって、この訓練枠組みの評価データを得ることができた。次節で、この試みと評価結果を略述しよう。

ハワイの学校における暴力予防訓練プロジェクト

私はまず、ハワイ暴力予防コンソーシアムという地域の民間組織から、暴力予防プログラム推進に関心を持つ校長ら、カウンセラー、教員たちを訓練する許可をもらった。ハワイ大学教授として、私は、新しい3単位の大学院レベルの学校暴力予防方略というコースを設定することができた。これは4小学校の校長ら、カウンセラー、教員たちにひらかれ上述のコンソーシアムが、学校暴力予防総合プログラムの発展に役立つと見て財政的援助をしてくれた。上記の認可によって、私がハワイ大学の新课程担当者として謝礼を得ただけではなく、関心を持ってコースに参加した人々も、登録料として63ドルもらった。3単位の大学院レベルコースに参加して普通の授業料より1500ドル以上も得をしたことは、このユニークな専門的発達訓練に参加した人の多くに魅力的だったろう。この訓練コースのもう一つの利点は、コンソーシアムのお陰で授業がすべて4小学校でなされたことだった。

このコースで課せられることは、ハワイ大学にあるカウンセリング、心理学、教育の大学院他コースと同じだった。受講者は、
(a) 週1回3時間16週の授業に出席する。
(b) その時々を読んでくる宿題を全部やる。
(c) 授業中の討論に参加する。
(d) 読む宿題と討論への反応として小レポートを3回出す。

(e) 暴力予防プログラムの行動計画を作成する。

(f) 自校での計画の実行とその成果を評価する。

参加した教師たちの行動計画と評価の報告は、受講の中心的活動であった。暴力予防のプランをたてさせ評価を求めたことは、いくつかの積極的な訓練効果を生じた。

(a) 受講者たちを理論（いろいろな暴力予防モデルの学習）から実践へと励ました。つまり、暴力予防プログラムの理論的理解も広くなったがそれを使って勤務校でいろいろな計画を立て、調整を試みた。

(b) 受講者全員が、ほかの仲間がそれぞれの学校で試みた多様な予防方略について学んだ。受講者たちが立てたプランを検討する時間をコースの進行中に度々設けたので、仲間がそれぞれの学校と地域で暴力問題改善に取り組んだ多様な試みを、全員が学ぶことができた。

(c) 受講者がリポートした評価データの実地活用。コースの要請で校長ら、カウンセラー、教員たちがそれぞれ立てたプランと、その結果は有用な情報となった。カウンセラー、校長らがやがて暴力予防策の資金つき募集に応ずる際に使える、新しいデータベースができたのである。実際にこの訓練プログラムに参加した内の何人かは、コースが終わった際に使える新しいデータベースを進めようと追加資金を申請する際に、この新データベースを利用した。

このコースのカリキュラムは、われわれが1999年に開発した暴力予防総合モデルに基づいていた。この理論モデルにある生徒への直接・学校・地域への直接、生徒への間接、学校・地域への間接サービスを進めるのに必要な知識技術を受講者たちに学ばせようと、情報与え討論をさせただけで

なく、授業の2コマを使って研究と評価方略について幅広いよう論をさせた。これは彼らの実践プランを自校で試行したとき、結果を受講者が評価するのを助けるためである。

受講者たちは、授業の8回目までに、どんな暴力予防方略をやりたいか自由に選んで実践プランを立てた。このコースのシラバスによれば、受講者たちは、個人でプランを出すか他のメンバーと組んで暴力予防方略のどれを一緒にやることになったのかを計画書にして提出しなければならない。個人でもグループでも、後者ならいろいろなプランを一緒に試みてコース最後の回に仕上げの宿題つまり提出レポートを出すことになっていた。

受講者たちに自校でやってみたいと本当に関心のある暴力予防策を自由に選ばせることによって、さまざまな学校暴力予防方略がある中から「選ぶ」力をつけたいと思った。しかし、やってみてわかったのは、出された実践プランが膨大な数の方略のように見えて、やはりわれわれの暴力予防枠組みのうちの1～2の要素におさまリ、例の4要因モデル中他の要因にはおさまらないということだった。

訓練の視点で言うと、校長ら、教員、カウンセラーたちが自校で暴力予防総合プログラムを推進するよう助けるには、彼ら自身の関心と技術に合うプランでやらせればいいように見える。しかし、私は受講者たちに（a）関心あるプランを選ぶにはまだ力不足なことと（b）暴力予防への総合的な取り組みには幅広いサービスを知ることの重要さとをはっきり分かせようと、実践方略はどれもわれわれの暴力予防モデルの4つのサービス要素に分類できることを繰り返し強調した。

ハワイ学校暴力予防訓練プロジェクトの成

果を評価する

ハワイ学校暴力予防訓練プロジェクトに登録したのは77人だった。訓練が始まってまもなく3人がやめた。3人ともにやめる理由は、コースのきまり通りやるには時間が足りないことだった。表1はコースを完遂した74人の一覧である。
この4校は、ハワイ暴力予防コンソーシア

ムが選んだ、ハワイ学校暴力予防訓練プロジェクト協力校である。74人から結局38の実践プランが出された。表2は受講者達が各校でプランを立て実施した暴力予防活動の要約である。見てわかる通り、受講者たちが出した実践プランはすべて、われわれの暴力予防枠組のサービス4要因に分類してある。

表1. ハワイ学校暴力予防訓練プロジェクトを完遂した74人の一覧

	学校管理者	カウンセラー	教師	合計
学校1	2	2	18	22
学校2	2	4	17	23
学校3	1	1	15	17
学校4	0	1	11	12
合計	5	8	61	74

表2. 受講者たちが自校で実施した暴力予防サービスのまとめ

(1) 生徒への直接サービス

- 1、3つの新しい怒りマネージメントのカウンセリンググループが、関係3校で成立した。
- 2、4つの新しい小さなカウンセリンググループができて、生徒たちの社会的スキル、対人問題解決方略の発達をめざした。関係4校全てに少なくとも新グループがスタートした。

(2) 学校・地域への直接サービス

- 1、21の新しい学校内活動。3校で5例づつ、第4の学校では6つの新しい学校活動が始まった。

(3) 生徒への間接サービス

- 1、親との連繋が一例と、相談プロジェクト全4校で始まった。
- 2、地域連繋と相談プロジェクトが2校で始まった。

(4) 学校・地域への間接サービス

- 1、3人の校長（みんなこの訓練には不参加）による相談試行を含む3つのプロジェクトで、生徒指導方針と実際に調査し変更することの重要性について論じ合った。
- 2、4校で働く全員が、地方公務員、法律関係者らと提携して地域ぐるみの平和データを組織する大プロジェクトをやり、小学校3000以上が行事に参加。平和デー行事の目的、生徒たちに、彼らの生活および、この世界に非暴力を推進することの大切さを共に考え認識させることにあった。

結論

ハワイ学校暴力予防訓練プロジェクトにおける訓練要素の評価から、いくつかの結論を出すことができる第1の結論は、校長、カウンセラー、サイコロジスト、教員たちを対象にこうした専門訓練を行う際には、明確な暴力予防理論に基づいてすることが大切だ、ということである。それによって指導者は、暴力予防プログラムへの「総合的」取り組みの持つ意味を明らかにできるし、校長らカウンセラー、教員たちがどうやれば自分たちの努力を束ねて学校、地域、国における暴力問題を扱う総合的システムづくりにつなげていけるか、の筋道を提供できる。われわれが作り磨いてきた(D'Andrea and Daniels 1998, Daniels 1999)理論の枠組は、カウンセラーたちが学校で暴力予防プログラムへの総合的な取り組みを進める上で、大変有用な道具であることが分かった。

第2は、ハワイ学校暴力予防訓練モデルの有効性を示す多くのデータを用いることによって、この専門的な開発訓練プロジェクトが学校暴力予防総合プログラムを小学校の現場で実現する有効な道であると分かったことである。この専門的開発訓練プログラムの有効性は、次の諸事実に表れている。

- ・ 辞退率が低いこと（このプロジェクトに登録した77人中74人が、コース中に求められた課題をすべてやりとげた）。
- ・ このプロジェクトを完遂した校長ら、カウンセラーとサイコロジスト、教員達から指導者が得た高いコース評価店（この訓練プロジェクトに参加した全員が、5点スケールで4.45点のコース評価をした）。
- ・ プロジェクトを完遂した74人全員が、われわれが唱える4サービス要素に基づく暴力予防方略を用い進め、それを学校暴力

予防への総合的取り組みの確立に必要と評価した。

受講者達が自校で開発実施したプロジェクトのうち多数が新しい学級サービスタイプだった（学校・地域への直接サービスは21例あった）ことは重要である。この事実自体は、この訓練プロジェクト参加者の多くが学級担任教師だったのだから驚くには当たらない。しかしこの事実は、彼らの学校がわれわれの理論的枠組に沿って、学校暴力予防総合プログラムを実現するためには、学校教員たちが他の3つのサービス要素（生徒への直接、生徒への間接、学校・地域へ間接）にも積極参加の必要があることを示している。

ハワイ学校暴力予防訓練プロジェクトの評価結果は、その訓練計画で使われた理論的枠組が、他のカウンセラーやサイコロジストが校長、教員ほかに暴力予防プログラム作成実施のための知識とスキルを得させようと訓練サービスを企画する際にも、有用な道具となることを示唆している。

限界

この専門的訓練枠組を用いることの大きな利点にも関わらず、ハワイ学校暴力予防訓練プロジェクトには重要な限界が二つある。

第一は、このプロジェクトで得られた実践プランや評価レポートが、すべて小学校で働く人々から出ていることである。この限界を考えると、ハワイ・プロジェクトで用いた発達の生態学的訓練モデルの有用性を他の教育場面（中学、高校、大学など）で試みてこの訓練モデルの有用性が他の学校場面でも見られるかどうか見たいと、研究者たちはふり立つのである。

また次の事柄も重要である。ここで報告した評価の試みは、訓練モデルが校長ら、カウンセラーとサイコロジスト、教員たち

に暴力予防への総合的取り組みでの詳しいサービスを考えさせ進行させる効果に集中している。この評価努力は、そうした新しいサービスが生徒に働きかけて対人的問題の解決にあたって暴力の使用を避ける力を増したり、暴力のレベルをこれまでその学校で起こったと記録されているものより下げたりするかには、触れていないのである。この面の結果を得るには、今後研究者による次のチャレンジが必要である。

ハワイ学校暴力訓練プロジェクトの評価に関して明らかな限界はあるが、このモデルは他のカウンセラー、サイコロジストたちがそれぞれの学校・地域で総合的な暴力予防プログラムを推進する際に、有効な方略となると考えられる。それによって彼らがアメリカで、またこの種の総合的取り組みが働き得る世界各地で、暴力の横行に有効に立ち向かい得ることが望まれる。こうした助力によって校長ら、教員たち、カウンセラーとサイコロジストが現実的方略を立てる新しい道を学び、その中で生徒たちがより平和で尊厳な人生を歩き得るなら、それはより安全な学校・コミュニティを創出し、生存、自由、幸福追求の基本原則を強めることになる。この国はまだ、その途上にある。

文献

Bakers, S. (1999). *School counseling for the twenty-first century* (3rd ed.). New York: Merrill-Macmillan.

Chun, P. (2001). *Demonstration project components for Hawaii school-based violence prevention curriculum development and integration: seeds of peace for today and tomorrow.*

The Violence Prevention Consortium & The Hawaii State Commission on the status of

Woman. Honolulu, HI: Author.

Conyne, R. (1994). Preventive counseling. *Counseling and Human Development*, 27, 1-10.

D'Andrea, M., & Daniels, J. (1999). Exploring the psychology of white racism through naturalistic inquiry. *Journal of Counseling and Development*, 77, 93-101.

D'Andrea, M., & Daniels, J. (2001). The changing demographic structure of our society: Future challenges facing the counseling profession. In D.C. Locke, J. Myers, & E. Herr (Eds.), *The handbook of counseling* (pp. 529-540). Pacific Grove, CA: Sage.

D'Andrea, M., & Daniels, J. (2002, August). School-based violence prevention training: A developmental-ecological approach. A paper presented at the annual meeting of the American Psychological Association. Chicago, IL.

Daniels, J., Arredondo, P., & D'Andrea, M. (1999). Expanding counselors' thinking about the problem of violence. *Counseling Today*, 41, 12, 17.

Elliott, D. S., Hamburg, B. A., & Williams, K. R. (1998). Violence in American schools: An overview, In D. S. Elliott, B. S. Hamburg, & K. R. Williams (Eds.) *Violence in American schools* (oo. 3-30). New York: Cambridge University Press.

Futrell, M. H. (1996). Violence in the classroom: A teacher's perspective. In A. Hoffman (Ed.), *Schools, violence and society* (pp. 3-19). Westport, CT: Praeger.

Ginter, E. J. (2002, Spring). *Journal of*

counseling and development (JCD) and counselor's interwoven nature: Achieving a more complete understanding of the present through historization (Mussings of an exiting editor An editorial postscript). *Journal of Counseling and Development*, 80, 219-222).

Hamburg, M. A. (1998). Youth violence is a public health concern. In D. S. Elliott, B. S. Hamburg, & K. R. Williams (Eds.), *Violence in American Schools* (pp. 120-145). New York: Cambridge University Press.

Hart, A. (2002). *How to stop elderly abuse: A prevention guidebook*. Lincoln, NE: Writers Club Press.

Howard, K. A., Flora, J., Griffin, M. (1999). Violence prevention programs in schools: State of the science and implications for future research. *Applied & Preventive Psychology*, 8, 197-215.

Hughes, J., & Hasbrouk, J. (1996). Television violence: Implications for violence prevention. *School Psychology Review*, 25, 134-152.

Jones, J. M. (1997). *Prejudice and racism* (2nd ed.). New York: McGraw-Hill.

Lewis, J., Lewis, M., Daniels, J., & D'Andrea, M. (2003). *Community counseling: Empowerment strategies for a diverse society* (3rd ed.). Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.

Luthar, S. S. (1999). *Poverty and children's adjustment*. Thousand Oaks, CA: Sage.

National Health and Education Consortium. (1999). *Violence against women: A national report*. Washington, DC: Author.

Salzman, M., & D'Andrea, M. (2001). Assessing the impact of a prejudice prevention project. *Journal of Counseling and Development*, 79, 341-346.

Southern Poverty Law Center. (1999). *Tracking hate groups and crimes in the United States*. Birmingham, AL: Author.

Sue, D. W., & Sue, D. (2002). *Counseling in the culturally diverse: Theory and practice* (4th ed.). New York: John Wiley & Sons.

Swisher, J. D. (2001). The costs, costs effectiveness, and cost-benefit of school and community services. In D. C. Locke, J. E. Myers, & E. L. Herr (Eds.), *The handbook of counseling* (pp. 669-680). Thousand Oaks, CA: Sage.

U.S. Department of Education. (1998). *Early warning, Timely response: A guide to safe schools*. Washington, DC: Government Printing Office.

Walker, H. M., & Gresham, F. M. (1997). Making schools safe and violence free. *Intervention in School and Clinic*, 32, 199-204.